

西安考古訪問記

多田 狷介

東洋文庫中国古代地域史研究班の池田雄一・窪添慶文・多田狷介（以上研究員）・石黒ひさ子・市来弘志・兼平充明・高津純也・山元貴尚（以上研究協力者）八人の一行は、二〇〇九年十二月二十三日午後成田を発ち、上海経由で西安に赴いた。この夜から十二月二十七日早朝、帰国の途に就くまで、大雁塔雁引路四〇号の唐華賓館に四泊した。二十四・二十五・二十六の三日間、『水経注疏』巻十九「渭水下」に登場する西安周辺の遺跡の幾つかを踏査・視察した。

西安滞在中は勿論、訪問準備の段階から、陝西師範大学西北歴史環境与经济社会发展研究中心（略称「環発中心」）の侯甬堅教授と李令福研究員等の周到懇篤な配慮に預かり、感謝にたえない。

十二月二十四日（木）

九：〇〇、李令福研究員と張莉・潘偉の両博士、陝西師範大学よりマイクロバス（運転手は、前回二〇〇七年五月の天水

を中心にした渭水上流とその流域調査のときに世話になった辛師傅。以後三日間世話になる」で賓館に到着。一行これに同乗して出発。渭河公路橋上より渭水を見学。その後、渭水南岸に沿って文王廟に至るが、鍵がかかっている廟構内には入れなかった。そこから文王嘴を指す。李研究員によれば、史蹟の標識があるはずなのだが、それが見つからない。このあたりの北の対岸は両寺渡といい、そこと文王嘴とを結ぶのが、漢代の西渭橋（『水経注』では便門橋）架設の有力候補地である。しかしながら、その正確な場所は確認できなかった次第。西安市全域、再開発の実施中。市内西北のこのあたりから咸陽市にかけても大規模な道路工事中で、数年前に文王嘴を見学した李研究員にも見当がつかない。工事に従事している土木作業員は地元の農民ではなく、もつと僻地からの出稼ぎ労働者らしく、さらに地理に不案内。

文王嘴を断念して、一九八六年に沙河故道（往時の澧水）上で発掘された古橋遺跡を指す。ここも道がわからず、工事中で水のためたまった道路を往復してようやくたどりつく。遺跡は和興堡近くの西屯村にあり、発掘後、上にドームをかぶせて保存してある。漢代の西渭橋は両寺渡と文王廟を結ぶ現渭水上にあったのか、それとも新発現の沙河古橋がそれに当たるのかについては論争がある。概略、歴史地理学者は前説を主張し、文物考古学者は後説を主張する①。

午後は、まず阿房宮前殿址に行き、遺址構内を踏み、版築の跡を観察。さらに烽火台、上天台を見学。『水経注』に記載のある磁石門の遺址は武警学院の構内にあり、門の閉まっている時間ということで、見学できなかった。西安市内に戻り、西安地圖出版社に立ち寄って買い物。一旦賓館に戻って小憩。

夜は陝西師範大学に赴き、環発中心にて、多田が「訪問西安的日本人」と題した講演を行った。

二〇〇九年の春に東洋文庫を訪れた侯甬堅・江村治樹編『中日文化交流の歴史記憶及其展望』（陝西師範大學出版社、二〇〇八年一〇月）を賜った。その中に史紅帥「清末民初來陝日人活動的初步研究」なる一篇があり、興味を覚えた。その延長線上にいささかの個人的回想なども加味して今回の講演の内容を構想した。以下に、小見出しの如きもののみを示すと、「一 竹添進一郎・足立喜六・桑原隲藏・宇野哲人・小竹文夫」、「二 日本僧円仁、入唐求法の大旅行——遣隋使・遣唐使・井真成、ii 最後の遣唐使里の請益僧円仁、iii 円仁の旅遊記『入唐求法巡礼行記』」、iv 『入唐求法巡礼行記』の抄本・刊本・訳注本」、「三 廃止遣唐使以後——高岳親王（真如上人）、ii 雪村友梅、iii 阿南 Virginia 史代著『円仁慈覚大師の足跡を訪ねて——今よみがえる唐代中国の旅』」（ランダムハウス講談社、二〇〇七年一〇月）と陝西省出身の画家野雪による書中のイラスト——となる。

用意した中文約九六〇〇字の講演プリントを六〇名ほどの参会者（多くは大学院生）に配布。東京音羽の護国寺にある竹添進一郎の墓や阿南著書中の野雪のイラスト等、一〇葉ほどの写真を映写してもらいながら、多田が正一時間で講演プリントを読み上げ、その後、史紅帥博士や李研究員から若干の質問や教示を受けた。

十二月二十五日（金）

八・三〇、マイクロバスにて賓館を出発。昨日の三方に加えて大学院生李某君も同行。

まず、北常家荘にある石婆廟に至る。入り口に「陝西省第一批文物保護單位牛郎織女石刻」と刻んだ石碑がある。毎

年旧曆七月七日の七夕には盛大な祭りがある由。今の石婆廟にあるのは実は牛郎（牽牛）像、今の石爺廟にあるのは実は織女（織姫）像であるが⁽²⁾、民間ではそれが転倒されてしまった。

石婆廟は村民の信仰を集めていて、われわれが見学した時も年輩の女性二人が石像を清め、衣裳の着せ替えをしていた。李研究員の話によると、文革時には石婆像を碑林に運び、後さらに西安市内の別の場所に保存したが、村民達が毎年そこに至って祭祀するので、ついにこれを村に返却したとのこと。廟にはまた「牛郎織女のベッド」とされる巨石が残されており、「石爺は石婆のところへ寝小便をし、今の石爺廟まで逃走した」との口承が伝えられているとのこと。続いて、鬪門鎮に至り、ある工場の敷地内にある石爺廟を見学。石像は文革中に一部破壊され、最近の修理の跡を留めている。石爺廟に対する信仰は石婆廟に対するそれには及ばないようである。

ついで馬營寨に至る。この村は元來豊河（豊水）辺にあったが、一九五〇年代の洪水で現在地に移動。その際に建てられた一軒の民家の軒先から、石造の鯨魚の尾と見られるものが発現した。本日これを見学したが、鯨魚の本体部分は陝西省歴史博物館の所蔵となっているとのこと。

午後は広大な漢長安城遺址内の数箇所を見学。まず漢長安城門址中では保存状態がもつとも良いという東側の霸城門址に赴く。マウンドにサンザシが密生していて、登るのに苦労した。この後、池田先生と李君は陝西師範大学の乗用車で漢陽陵博物館の見学に向かう。他の一行は長楽宮凌室（冰室）遺址博物館と甬道の多い長楽宮四号（臨華殿）建築遺址を見学。いずれも発掘部分にそのまま屋根をかぶせ、発掘址を直に見学できる部分と、保存のために埋め戻し、その

上に遺址の位置が確認できるように標識した部分とにわかれる。開門時間中なら誰でも無料で見学できる。

この後、近年試掘された五胡十六国から北朝期の長安城内の宮城の南墻の一角〔漢長安城樓閣台遺址〕の石の標識がある)を見学した。ここの版築は瓦礫が混じっていて、霸城門や阿房宮の版築に比べるとかなり粗雑である。さらに、樓閣台遺址の北側の、農地になっている宮城地域を見学(3)。先年試掘に参加した村民の一人に出会った。試掘には約一か月を要し、毎日の作業は多忙だったとのこと。試掘終了後に遺址を埋め戻す作業に参加したというもう一人の村民にも出会った。樓閣台遺址近辺には、西安市内からと思われる大量のゴミが廃棄されている。ついで西走して漢長安城北側の廚城門址を見学。ここの保存状態も良くない。近い将来消滅の危険性も感じられるほどであった。

黄昏、西安市内の古籍書店に至り、侯教授が予約してくれていた〔清〕楊守敬等繪編『水経注図(外二種)』(中華書局、二〇〇九年九月)他を受領。またこの店で北京出張から戻って来た侯教授や陽陵見学を済ませた池田先生たちとも合流。一同、回民街の老舗「樓外樓」に赴き、羊肉泡饃等を食しつつ歓談。

十二月二十六日(土)

侯教授、張・潘両博士と大学院生李某君四人が見え(李研究員は夜の宴会には見えた)、八・三〇、賓館を出発。途中、西北大学の呂卓民教授が待ち合わせていて同乗、以後種々案内して下さる。

市内から子午大道を南下して瀟河橋上より瀟河を眺めてから、西安市南の郊外の名刹香積寺に至る。元來西北流し

ていた澇河を西南流させて、香積寺の西で澇河と合流させ、さらにこの合流を西向させて灃河（灃水）に入れた。その澇河と澇河の合流点を見学した。現在は合流後の河流も澇河と称するが、『水経注』には交水とある（4）。

澇河（交水）畔で陝西の地方劇秦腔の練習をしている農民風の中年男がいた。張博士の聞き取りによると、「澇河は牛郎織女が出会うところ（石婆廟・石爺廟のあるかつての昆明池畔）へ流れて行く」と歌っている由。

香積寺へ戻り、西南向する澇河を挟んで寺の西にある周家莊村に向かう。橋には土囊が積まれて、マイクロバスは進入できない。後でわかったが、大量の川砂を積んだトラックの通行によって、この小さな橋が壊れるのを避けるためであった。

バスを降り、徒歩で橋を渡ったが、橋と平行して高架の農業用水路が設けられている。澇河から引水する灌溉水路として、「農業は大寨に学べ」のスローガンの下、七〇年代に建設されたものとのこと。呂教授はこの近くの村の出身で、往時、この用水路の建設に参加したとのこと。なお現在は別な引水施設があつて、この用水路は使われていない。

周家莊村付近から西北に向かつて澇河（澇水）故道が残存している（5）。故道の一角を見分した際に、そこに堆積した川砂を採掘、トラックに積み込んで運び出しているところも見学した（採掘した川砂を選び出す切り通しの壁面部にメジャーを当ててみると、古墓の痕跡等を認める約二メートルの堆積土層の下が数メートルの川砂層になっている）。西部大開発の一拠点である西安市内・郊外もビルや道路の建設ラッシュである。用材としてのコンクリートに川砂が不可欠であり、その需要は莫大であろう。川砂の採掘は周家莊村村民にとっての一大産業であるらしい。働いている人

に聞いたら、軽トラック一台分で五〇元とか言っていた。また村内の民家の壁に「爬山虎売ります」といった張り紙がある。「爬山虎」とは壁等に這うツタの類である。しかし、張り紙のそれは、川砂をトラックに積み込む際に用いるベルトコンベアのようなものらしい。

「先進学校」の標識を掲げた周家莊小学の前で、迂回して来たマイクロバスに乗り込み、西安市南郊長安区の学園都市を走る。陝西師範・西北・西安外国語等たくさんの大学の新キャンパスが展開している。長安区内の湘菜食堂で昼食。

午後はまず少陵原の西端にある興教寺に行く。この寺は七世紀後半の創建。玄奘三蔵が埋葬された。拝観料一人一〇元を納めて受け取ったパンフレットに「是古時樊川八寺之一、在寺門前俯視樊川、涵河如帶、南望終南、万峰聳立、西觀神禾、起伏如画、風景秀麗、環境幽美」とある。その後、北上して前漢宣帝の杜陵に向かった。苦勞してマウンドに登ると、多くの陪葬陵が視認できる。

ついで、白鹿原東北端に位置する前漢文帝の霸陵に至る。陵前の山麓に十余の石碑が配列されているが、中でも清乾隆四十一（西曆一七七六）年、陝西巡撫畢沅が書いて立てた「漢文帝霸陵碑」が最も大きく、異彩を放つ。なお、天然の山塬を利用したこの陵の正面は整ったピラミッド形を呈している。「水経注」には王燦の七哀詩・其一の「南登霸陵岸、迴首望長安」の二句が引用されている。若い人たちが登頂しようとしたが、急斜面で、最後もう一步のところで断念した。山麓から数分車に乗り、灞河（霸水）辺に移動。礫石の多い河原に立ち、東南より西北流する河水を掬する。

灞河畔から東三環路に入って西安市中に戻る。途中、橋上で停車してくれたので、下車、欄干に倚って滻水を見る。水量は少なく、灞河よりはかなり小さい。

夜は陝西師範大学の招待所内のレストラン「啓夏苑」で懇親の宴会。東洋文庫側八名に、朱士光・侯甬堅両教授等環發中心側と西北大学の呂卓民教授、招待所内で思いがけなく出会ったソウル大学東洋史学科の朴漢濟教授にも加わっていただき、総勢一六名。歡を尽くした。

十二月二十七日(日)

六：〇〇、唐華賓館を出、MU六二二便、八：〇〇、西安咸陽国際空港を離陸、一時間弱で上海浦東空港に着陸。正午、浦東空港を離陸、一五：二五、無事成田空港に着陸。解散。

以上、二〇〇九年末の「西安考古訪問」の概略を記した。あまりメモをとらず、途中でカメラの電池も切らしてしまった多田は、執筆を命ぜられて甚だ窮した。詳細な記録を提供してくれた石黒ひさ子氏に感謝する。石黒記録、環發中心が作ってくれた「日本東洋文庫水経注研究班西安訪問計画」中のタイムテーブルや地図・文献リスト等の資料、西安の地図、若干の研究書や研究論文、自分の貧弱なメモとデジカメ中の僅かな画像、インターネット等を繰り返し見ているうちに、大分記憶がよみがえり、また曖昧な認識を訂正することができた。改めてこの「訪問」の有意義さを自覚し

た次第である。

注

- (1) 李令福著『古都西安城市布局及其地理基礎』（人民出版社、二〇〇九年一月）の「第四章 西安周辺地理環境及其變遷」中の「漢西渭橋廡」の小節参照。
- (2) 前掲李著書中の「第五章 秦漢都市水利与華清池温泉文化」中の「昆明池の多種効能」の小節、および俞偉超「应当慎重引用古代文獻」（『考古通訊』一九五七年第二期）参照。
- (3) これらに關しては、中国社会科学院考古研究所漢長安城工作队「西安市十六国至北朝時期長安城宮城遺址的鉗探与試掘」（『考古』二〇〇八年第九期）参照。
- (4) 呂卓民「西安城南交漓二水的歷史變遷」（『中国歷史地理論叢』一九九〇年第二期）参照。
- (5) 李前掲著書中の「第五章 秦漢都市水利与華清池温泉文化」中の「昆明池上游漓漓水的人工改道及交水的形成」の小節および呂前掲論文参照。